認知機能から見た比喩の意味構造

李　徳奉

1．はじめに

アリストテレス以来の長い歴史を持っている比喩の修辞学的研究は、ルネッサンス以後修辞学の衰退とともに次第に弱まっていったが、最近は、言語学や心理学的観点からの研究が盛んに行なわれている。Metaphorに関する文献は、1970年以前だけでも3000件に登るし（Shibles:1970)、引続き、1970年から1984年の夏に至るまで4000件を越える文献が出されている（Noppen: 1985）。また、データーベース CDI（Dissertation Abstra-cts Online）に登録されている1980年代の博士論文だけでも233件(1988年10月現在)に登ることなどから見ても比喩の研究がいかに盛んであるかがよくわかる。

このように比喩の研究が新たに脚光を浴びるようになったのは、認知研究の急増と密接な関係を持っている。最近、認知研究が盛んに行なわれるようになったのは、Piagetの発達心理学やBrunerの認知の発達の研究などの一連の研究成果による影響も考えられるが、より直接的な原因は、人工知能開発における認知研究の不可欠性によるものではないかと思われる。このような事情から、比喩研究のほとんどがもっぱら認知の方に重点が置かれていて、比喩の意味自体の構造や認知過程などについてはほとんど研究が進んでいない。

本稿では比喩の意味構造を中心として知覚や概念理解に関する従来の研究成果を借りて、認知と比喩との関係、比喩要素の統語的構造と認知との関係、実際に認知される比喩の意味と構造などについて考えてみたいと思う。

2．認知の概念

認知に関する書物は日増しに急増しつつあるが、認知という用語がどういう意味合い

で使われているかについてはほとんど明らかにしていない。認知といっても、知覚、感覚、認識など似通った用語が多いので、本稿では最近の関心の的になっている認知の意味として佐伯(1981,pp.657-658)と芳賀(1988,p.39)の説明を借りたいと思う。佐伯は、「Cognitionは、ふつう認識という訳語が当てられ、普遍妥当な知識の獲得過程、または知識それ自体を意味する。認識行為は、情動や意志などの主観的過程と対立するものと見なされ、そこから純粋知的行為や知性の代名詞として扱われることもある。しかし心理学用語としては、認知と訳されることが多い。認知とは知覚、判断、決定、記憶、推論、課題の 発見と解決、言語理解と言語使用のように、生体が自らの生得的または経験的に獲得している既存の情報に基づいて、外界の事物に関する情報を選択的に取り入れ、それによって事物の相互関係、一貫性、真実性などに関する新しい情報を生体内に生成・蓄積したり、外部へ伝達したり、あるいはこのような情報を用いて適切な行為選択を行なったり適切な技能を行使するための生体の能動的な情報収集・処理活動を総称していうことばである」と言って、認知を情報の収集と処理活動として捉えており、芳賀は「認知すなわち知るという働きは環境からの刺激を知覚し、記憶し、思考し、その結果何か新しい習慣や思考内容（概念や知識など）を作りあげたり、また既に作られている習慣や思考内容を作り変えるといった一連の過程をまとめて認知過程と呼ぶ。」というふうに認知過程を四段階にまとめている。認知とはこのように広範囲な情報処理活動を指しているが、その処理過程上の基本的プロセスの一つである知覚に関する Neisserの「認知図式」は比喩の認知を説明するのに示唆するところが大きいように思われる。

３．認知の比喩的属性

認知理論は大きく分けて、認知過程内での表象としてのメンタル・イメージを「絵」的なものとして捉える立場と、命題による記述の形でコーディングされて存在するものとみる二つの立場があるが、本稿では、両立場をうまくマッチさせ第3者的立場を取っているNeisser(1976)の「予期シェマ」(schema:Bartlet,1932.p.201,Piaget,1952.Kagan,1971)による「認知図式」理論に基づいて、比喩の認知を考えてみたいと思う。

認知活動において情報獲得の手段は全く知覚に依存しているので、この最も基本的な認知活動の属性はそのまま認知の属性をも決定するものと思われる。知覚に関する研究

は「ゲシタルト」の伝統を引く小グループや感覚過程の測定と感覚生理学に従事していた少数の心理学者たちによって行なわれてきた。前述の佐伯やNeisserらによると、知覚そのものも知覚者の経験や習熟、即ち、前もって知っていることに依存しているそうである。知覚のうち一番情報量の多いのは視覚であり、この視覚にとって最も重要な認知構造は,見る活動をコントロールするという予期図式（schema）と呼ばれるものである。認知図式に関するNeisserの説明によると、知覚の際、知覚者は眼や頭などの身体を動かすことによって情報を有効なものにするために探索することになり、この探索の結果抽出された情報は元の図式を修正することになる 、また、この修正された図式は、さらに次の探索を方向付けさらに多くの情報を取り入れる準備を整えるといった、いわゆる、知覚循環（perceptual cycle)が行なわれるということである(Neisser 1976,PP.20-21)。結局人間は、見えるものを見ているのではなくて、予期していたことだけを見ているということであろう。Neisserは、こういう知覚循環を図1のような認知図式で表わしている(Neisser1976.p.112)。

第１図　認知図式

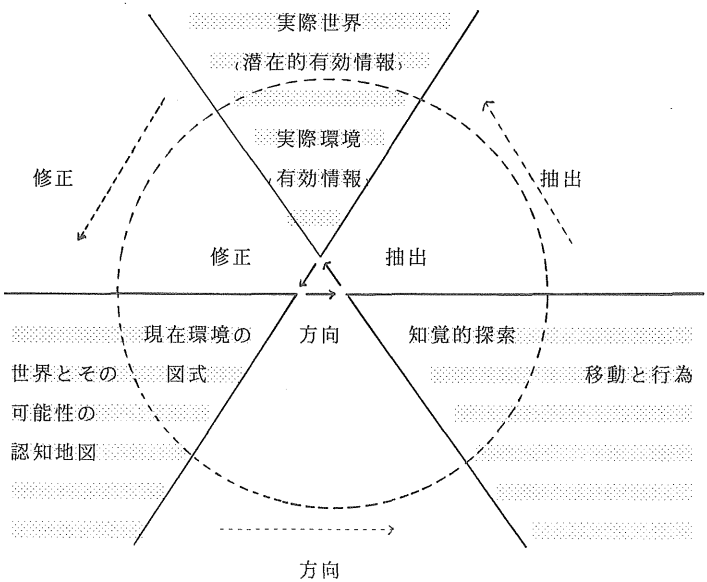


図1のように、Neisserはメンタル・イメージを「予期図式（現在環境の図式）」「探索」「対象（有効情報）」からなる全体的活動としての知覚サイクルの一部として予期図式を位置づけている。1節で触れたように、本稿でNeisserの理論を取り入れているのも、Neisserの考え方が、メンタル・イメージを絵的なものとして見るグループと命題的なものとして捉えるグループのちょうど中間的な立場にありながら、どちらかと言えば、絵的に捉えている方に近くて比喩の認知過程を説明するのに適切と思われたからである。なぜならば、記号どうしの選択制限、とりわけ文法的選択制限などの場合のメンタル・イメージは命題的に処理されるであろうが、比喩のように感情や情緒まで帯びた具体的な表現の場合は絵的な処理過程も必要となるであろうから絵の方に近いながら両方の機能を取り入れているNeisserの考え方の方が比喩の認知過程の理論として適していると思われたからである。このような図式は経験によって構成されるであろうから、文化の違いによって生じる認知的技能の違いは当面の文化の中でのそれぞれの生活上の課題の違い、それぞれの生活の素材の違いによって生じるものであるということを証明したColeらの研究結果とも一脈相通ずる所がある(佐伯胖.1982,pp.22-26)。クペル族を調査対象にしたこの分析によると、クペル族の推論は仮定から導くのではなく、事柄に関する自分の知識によって推察していること、与えられた課題文を自己流に言い替えて記憶してしまうということである。（Cole&Scribner,1974） このようなことはクペル族に限ることではなく、経験によって図式化された予期図式に従って行なわれる知覚を持つ人間の共通した推論のパターンではないかと思われる。

比喩は文中で行なわれるわけであるから、比喩の認知においても生活経験や文脈に基づいた予期図式が形成されるわけであるし、このような予期図式によって比喩の概念が推論されるようになるものと思われる。 宮崎清孝（1982,p.62)も概念の理解についてAnderson(1976,1980)、Wittgenstein(1953),Rosch & Mervis(1975)らの研究結果に基づいて「ある概念が与えられると、それに対する私たちの視点は、その概念の個別例群の持つ客観的な特性によって決ってしまい、私たちは概念をそこからしか見られないことになってしまう。」と述べている。そして、こういうふうに概念が間接的に理解される視点的方法を「のようなもの」的な認識と呼び、われわれは常に概念とは無関係なものまで持っている概念の一側面に過ぎない個別例を通して概念を理解できたと思うようになるということを指摘している。つまり抽象的な概念自体を理解しているのではなく、理解においては常に具体性に依存しているということである。このような概念理解の行

為はそれ自体が一つの比喩であるとも言える。概念の理解が具体性に依存しているという認知の比喩的属性のため、比喩という表現様式が生み出されたのではないかと思われる。従来の修辞学の分野では比喩を表現のテクニックとして扱ってきたけれども、比喩とは認知の本質的な一属性であることから、人工的なテクニック以前の自然な認知の本質とでも言えよう。即ち、認知における比喩の機能は、具体性によって与えられた新しい視点(view point)、即ち、図式の提供とでも言える。

文の中における語の意味は常に文脈によって限定されるわけだから、この文脈が視点を具体的に提示することになる。そもそもすべての言葉の意味は文章の中で語と語の結合によって初めて具体化されるわけだから、文脈によって視点が与えられるのは、比喩に限ることではない。ただ、言葉はもともと抽象的なもの故、どうしても抽象的な言葉だけでは具体性が足りないこともあり得るので、構造図や挿絵などを使ったりして理解を助けるのと同じように、比喩を取り入れるようになるものと思われる。比喩の「喩える言葉（喩辞」）によく登場するのは、だいたい知覚されやすい、日常生活のなかで意味的に慣れていて視点のはっきりと定まっている事柄がよく素材（喩辞）になっているのも認知の具体性のことと同じ脈絡であろう。「男は狼である」という表現が、「狼は男である」という表現よりも自然なのは、「狼」の属性に関する慣習的意味が「男」の属性よりはっきりしているからであろう。「比喩は、抽象的な概念や外部世界を理解し、納得して行くための認知的な方略の一種である。」と述べた山梨(1988,P.143)の表現通り、比喩は認知の方略であり、また、本質でもあると言えよう。

4．比喩の認知

1).比喩の認知モデル

比喩を認知モデルの観点から見ると、Kruszewskiの言語の二軸理論に基づいたものと思われるJakobsonの二つの連想のタイプ、即ち、「類似的なもの」と「近接的なもの」との二種類がある（Elmar Holenstein,1983,李、1986；今後、類似喩、近接喩と呼ぶことにする)。比喩は、主にMetaphorと Metonymyの二つのタイプを中心に述べられる場合が多いが、Metaphorは類似喩に、Metonymyは近接喩に当たる。しかし、類似喩には隠喩

以外にも直喩、諷喩、活喩、物喩、引喩、色喩、声喩、詞喩などがあり、近接喩にも換喩以外に提喩、類喩、字喩、などがある。LakoffとJohnson(1980)は、隠喩と換喩の基本機能を各々「理解」と「指示」に分けている。即ち、隠喩はある存在物を他の存在物によって理解するということ、換喩はある存在物を使って他の存在物を代わりに表わす、いわゆる置き換え的なものということである。これはLakoff(1987)が認知モデルとして挙げている四大類型のうちの比喩的写像と換喩的写像に当たるものである。この二つの認知モデルを視点の観点から見ると、類似喩と近接喩の違いは、視点を提供する素材を他の存在物から借りているか、その存在物の内部（時空間的、類的、構成的）から見つけ出しているかによっても分けられる。例えば、「男は狼である」の狼は、男から見た場合、他の存在物であるが、「花見に行く」の花と桜は、類的内部の関係にあるものなので、前者は類似喩、後者は近接喩に属することになるのである。（この二つのモデルについてのより具体的な説明は拙稿(1985,1986)を参照されたい。）

類似喩の場合は、「男(T)は狼(V)である」のように、統語的に先に出される場合の多い被喩辞（Ｔ）との照応関係から喩辞（Ｖ）の逸脱が感知され、認知図式ではその前後の文脈との関係によって意味の選択制限が行なわれ、比喩の根拠（Ｇ）が決まるわけである。ただし、近接喩の場合には、喩辞のＶがそのまま比喩の根拠のＧになるので、認知の際にはまず被喩辞のＴを見つける作業から始めるようになる。近接喩と類似喩は両方とも概念理解のための視点を提供してくれる点においては同じであるが、類似喩の場合には被喩辞の概念を個別的例示的に提示しているのに対して、近接喩の場合は、一部分を取り立てる度合が強くてパターン化の傾向がより強い特徴を持つ。（喩辞、被喩辞、比喩の根拠とは、Lakoff(1987,p.276)の言う a source domain, a target domain, a source-to-target mapping、Richards(1936,p.96f,117)の Tenor,Vehicle,Groundなどと同じ概念である。）

2).比喩の統語的構造と認知

比喩の概念理解における選択制限には、様々のメタ認知的な要因が総合的に働きかけるわけであるが、比喩の意味決定において最も中心的な働きをするのは、「喩辞」と「被喩辞」、「比喩の根拠」の三つであろう。これら三つの要素は、言語の線条的特徴のため、その統語的特徴による認知過程への影響も当然考えられる。

比喩をよく被喩辞Ｔと喩辞Ｖの逸脱による緊張として説明しているように、不断は照応しないはずの語どうしが結合されることによって、いわゆる前景化(foregrounding: 波多野,1988.pp.93-97,W. イーザー,1982.p.163) の効果が生じる。この前景化の度合の観点から見た場合、喩辞、被喩辞、比喩の根拠の三つの要素を統語的にどの様な順序で並べるかによって緊張の度合や認知過程に影響を及ぼし得ると思われる。同じ言語の中でも統語的入力のパターンは幾通りかあるわけであるが（李、1982,207),日本語と英語の最も典型的な比喩文のパターンとしては次のようなものが挙げられる。

a.彼は　ライオン　のように　大声をあげて　泣いた。　　Ｔ：被喩辞
　　Ｔ　　Ｖ　　Ｒ　　Ｇ　　Ｖ：喩辞
b.彼は　熊　のように　大きい。　　Ｇ：比喩の根拠
　　Ｔ　Ｖ　　Ｒ　　Ｇ　　Ｒ：比喩指標
c.He　cried　loudly　like　a　lion.
　　Ｔ　　Ｇ　　Ｒ　　Ｖ
d.He　is　as　big　as　a　bear.
　　Ｔ　　Ｒ　Ｇ　　Ｒ　　Ｖ

例文a・bのように日本語の場合は、Ｔのすぐ後にＶが来て逸脱による緊張を強くした後、比喩の印であるＲと、視点を表わす比喩の根拠は最終的に与えられる。一方、英語の場合はc・dのように、比喩の根拠Ｇや、比喩である印のＲを先に提示してから最終的に喩辞のＶが与えられ、日本語とはちょうど逆の構造になっている。日本語の場合は、逸脱を強く感じるようになるので、それだけ前景化の効果も大きいだろうし、聴者なりの解釈の余地も考えられるのに対して、英語の場合は、話者の視点が先に与えられてしまうので分かりやすく誤解は少ないであろうが、前景化の効果は低くならざるをえない。聴者の視点が先に提示される場合は、その後に来る喩辞の解釈に先に思いついた視点による影響が考えられるが、英語のように視点が先に提示されてしまうと、聴者による連想の余地は弱く話者の視点だけが伝えられるようになるであろう。これはちょうど陳述部が文の後尾に来る日本語と、頭部に来る英語の統語的特徴とも同じ傾向を示すものである。前景化の効果から見ても、日本語はＲ・ＧよりもＶが前景化されるのに対して、英語はＶよりもＲ・Ｇが前景化されるのである。

比喩のこのような特徴から両言語を分けると、日本語はＶＲＧ型、英語はＧＲＶ型とでも言えそうである。ただし、これはＴ・ＶやＲ・Ｇなどが文の表に出ている類似喩の場合のことであって、Ｔの代わりにＶだけが文の表に出ている近接喩の場合は、一般的な統語構造的差以外の、比喩要素の語順による言語間の差は考えられない。

５．比喩の意味

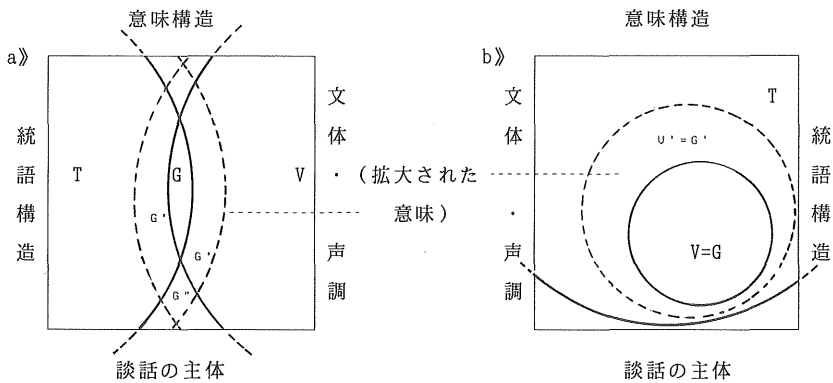
類似喩の比喩の根拠に当たる部分の意味、即ち、一般に言う比喩の意味は、喩辞と被喩辞の間の外形的イメージの類似や、構造・機能的類似、共感覚的類似などによって成立する。即ち、喩辞と被喩辞の相互作用によって成立するものである。外形的イメージの類似による比喩の場合、視覚的類似、聴覚的類似、嗅覚、味覚、触覚などの五感的イメージがすべて可能であるが、その中でも使用頻度の最も高いのは視覚的類似に関するものである。(eg.彼女の唇はバラのように赤い。）これは視覚的情報量が最も多いことと関係があるのではないかと思われる。

次に構造・機能的類似による比喩は、新しい商品の説明や教育の現場での説明のような記述喩によく使われるものであるし、共感覚というのは、ある対象に対する感覚的、価値的類似を言うが、ある事柄に対する感覚的イメージや文化的価値、感覚どうしの感覚的イメージの類似による場合が多い（黄色い声、暖かい色など）。感覚的イメージの類似は、人間なら誰でも同じような感覚イメージを抱く原文化的なものから、その文化独特の意味合いを持つものまであるので、後者の場合は、文化が異なるとはっきりした意味が掴めなくなる場合も多い。ただ共感覚的語どうしの修飾関係、即ち、どちらがＴとなり、どちらがＶとなるかは、一定の規則によることが明らかになっている。すなわち、”暖かい色”というと理解できるが、”黄色い体温”というと不可解な表現になる。このように喩辞Ｖになり得るのは、一般的に、触覚→熱感覚→味覚→嗅覚→聴覚・視覚という順に組み合わされると言われている。このことについては、Ullmann(1957),池上（1982),山梨（1988）、楠見(1988)などによって検証されている。２節で述べたように、比喩の意味特徴はもちろん具体性にあるが、その辞書的意味のほかに情緒的、価値的意味までつけ加わわるところにもあるように思われる。そういう情緒や価値は生活体験から生まれるものだからどうしても文化的影響の強い部分でもある。そういった意味にお

いて、比喩は言語記号の枠を越えた伝達の機能をも果たしていると言えるではないかと思われる。少なくとも比喩の意味は、視点や価値、情緒の一致、即ち、経験の一致によって読み取れるものと言えるであろう。

従来は比喩の意味というと、喩辞と被喩辞だけに焦点を合わせてそれらの共通部分であるG（比喩の根拠）だけが比喩の意味全てを表わしているように考えられていたが、喩辞と被喩辞の相互作用によって生成される比喩の根拠は、必ずしも喩辞と被喩辞の共通属性だけに留まるものではなく、喩辞だけの属性、被喩辞だけの属性が付け加わる場合もあるし、派生した全く新しい意味まで加わる場合もあるなど、かなり複雑な要因によって成り立つものと思われる。このような喩辞と被喩辞の間の意味構造を図示して見ると次のように表わすことができるであろう。

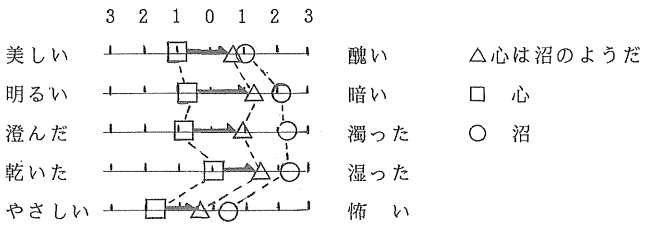
第２図　喩辞と被喩辞の意味構造



第２図-aの場合、ＴとＶの共通意味である比喩の根拠Ｇや拡大された意味のＧ',Ｇ"らが比喩の意味を成すところを表わすものであるが、Ｇ'はＴとＶの概念が互いに影響され意味が拡大されるのを示すもので、Ｇ"はＴ・Ｖの相互作用によってＴにもＶにもない新しい意味が生成されるのを示すものである。Ｖの概念は一般的に視点がもっとはっきりしたものであるのに対して、Ｔの場合は、視点がまだ具体化されていないものである場合が多い。それゆえ、Ｔの視点が曖昧であるほどＶの方の意味が基準になって視点が決まるようになるが、文脈によってＴの視点がある程度定まっている場合は、Ｖの

意味選択自体にもＴの意味が影響するであろうから、この場合にはＴの方の意味によっても視点が影響されるようになるのである。前者に関する実証は楠見（1987,P.10f)によってその分析結果が詳しく紹介されている。つまり、「心は沼のようだ。」という比喩文における被喩辞の意味が喩辞の方に傾いている様子を第３図のように表わしている。

第３図　ＳＤ法平均評定値で示す意味変化の例



楠見の表現を借りると「比喩表現の意味は、被喩辞と喩辞間の情緒・感覚的意味の相互作用の結果、被喩辞の意味が、喩辞の意味の強い影響を受けて成立する。」とまとめている。ただし、これはＴの視点がはっきり定まっていない時の情緒中心のことであって、前述したようにＴの視点が文脈によって与えられている時の比喩全体の意味関係となると、Ｖの視点もＴとの関係によって影響されるものだから、意味影響の方向性は一律的には言いがたいところがあるように思われる。

Ｔ（被喩辞）の影響によってＶ（喩辞）の意味選択が行なわれる例を次の実験によって確かめてみたい。この実験は、筑波大の院生8名を対象に「犬」を喩辞にした12の比喩文を与え、一文当り30秒ずつ、被喩辞の意味を思い出されるまま書かせたもので、次のような反応が得られた。（「犬」単独の連想以外は、各文とも上位5位までの連想的意味であり,順位は、連想された順位と頻度を合わせて決めたものである。）

比喩文	被喩辞	被喩辞の連想的意味
彼は犬だ。	彼	警察、手先、意気地無し、忠実、スパイ
ソビエトは犬だ。	ソビエト	ズルイ、スパイ、政治、警察、小心翼々
レスリングは犬だ。	レスリング	戦い、ころげ回る、うつ伏せ、どう猛、地面

彼女は犬だ	彼女	従順、可愛い、忠実、臆病、裏切り者
学校は犬だ	学校	暗い、檻、柴犬、文部省、難しい
天使は犬だ	天使	臆病、無邪気、天国、犬の天使、おかしい
国会議員は犬だ	国会議員	ずるい、金儲け、汚い、暗い、首輪
アメリカは犬だ	アメリカ	多様、臆病、メリーさん、噛みつく、激しい
テレビは犬だ	テレビ	下らない、うるさい、馬鹿、思いのまま、白黒
おじいさんは犬だ	おじいさん	忠実、白髪、おとなしい、小さい、とろとろ
愛は犬だ	愛	媚びる、尻尾を振る、まやかし、奴隷、ずるさ
（犬）		可愛い、賢い、吠える、怖い、白、忠実、小さい、大きい、泥、鼻

上で分かるように、同じ喩辞「犬」のイメージが別の被喩辞と結合されることによって全く違った意味を成している。このように比喩の意味は、ある一方だけの影響によるものではなく、喩辞と被喩辞相互影響によるものと言える。ただし、どちらの影響が強いかということは、文脈にどちらの視点がよりはっきり示されているかによるものと思われる。例えば、「彼はブタのように食べている」の場合、文脈上に彼に関するイメージがまだ与えられていないと、「食べている動作」だけでなく、彼の体格や鼻の形などまでブタの「顕著な意味」の影響を受け、太っているように思われがちである。しかし、彼は痩せた人だという文脈が先に与えられていたら、今度は、この文におけるブタのイメージが「痩せたブタ」のように変わってしまうのである。同時に、場面や文脈によって、彼の飢えている状況や出されている多量の食べ物の様子など、元々の喩辞や被喩辞の意味とは関係のない新しい意味まで付け加わるものと思われる。図3の場合、比喩の意味になるのはＧとＧ',Ｇ”を全て合わせたものと言えよう。このような比喩的意味は、その表現に限る一時的な意味であるので、喩辞にも被喩辞にも意味的変化は起こらないのが普通であるが、同じような表現が頻繁に用いられるようになると慣用化され被喩辞の意味として定着することもある。こういうふうに拡大された部分の意味は、文化が異なるとその差がより目立つようになる部分でもある。極端なナンセンスの表現の場合は、喩辞と被喩辞が意味的にかけはなれていて、喩辞と被喩辞の類似点であるＧがないのでその意味の把握も難しくなる。このように比喩の効果性や難しさの程度などもＧやＧ’、Ｇ”の多少によって影響されるものと思われる。

一方、図2-bのような近接喩の場合は、類似喩のように意味の拡大は起こるが（Ｖ’のところ）、この場合のＶ’は意味のパターン化が激しくてすぐ固定化する傾向がある。それは、類似喩が別の対象の概念同士の相互作用によるのに対して、近接喩の場合には、一つの対象の中のある概念を取り立たせたものなので、取り立たされたイメージがその対象の代表的イメージになってしまうからである。これはちょうど具体性を持って概念を理解する認知の本質とも同じ特徴と言えよう。

比喩の意味を決定する喩辞と被喩辞の相互作用に影響を及ぼす要因としては、単純に場面や文脈だけでなく、より多面的要因が考えられる。國広(1970)が「語の意味」に影響する要因として挙げている1.話者の本心的意味、2.場面的意味、3.声の質・量・速さなどのparalinguisticな意味、4.生理現象や体験など個人的意味（以上は非社会的性質に近いもの）、5.文音調の意味、6.文型の意味、7.意義素の文脈的変容、8.単一の単語及び慣用句などの意義素（以上は社会慣習的に定まっているもの）などは、そのまま比喩の意味成立に影響する要因にもなり得るものと思われる。同じく、語の意味を、統語構造、韻律構造、意味構造、談話構造などが階層的に関係し合うものとして捉えている中右(1984)の「階層意味論」も比喩の意味成立に当てはまるものと思われる。図２の四角いは、これら意味構造、統語構造、文体・声調、談話の主体などの要因によって比喩の視点が決まることを図示したものである。以上の観点から見ると、喩辞と被喩辞の「相互作用」というのは、談話全体の「総合作用」によって支配されるものと言えるし、そういうふうに生成された比喩の意味は、「談話総合的相互作用」の産物と言えよう。

６．おわりに

以上本稿では、知覚の認知図式による知覚予期と、概念理解の視点的方法に関する従来の研究結果に基づいて認知の本質としての比喩と、実際に認知される比喩の意味構造について述べてみた。全ての概念を具体性を持って把握する認知の属性は、具体性それ自体が比喩的であり、具体性でもって表わす比喩もまた認知の本質を成すものである。

比喩の意味生成の過程をNeisserの認知図式をもって説明すると、比喩の意味の予期図式になるのは、喩辞と被喩辞の辞書的意味であるが、これらが文脈や統語構造、韻律構造などの社会慣習的に固定した部分と、話者の意図や聴者の個人的経験及び話者との関

係、喩辞と被喩辞の相互関係などの一時的・場面的意味の探索過程を経て図式が修正され新しい図式をつくり出す、即ち、比喩の意味が確定するわけである。

従来、比喩の意味は喩辞と被喩辞の語彙的レベルにおける共通の意味素として説明していたが、実際に認知される比喩の意味は、統語構造や意味構造、文体、声調、韻律、談話行為の主体など、談話に登場する諸要素の影響の元で、喩辞と被喩辞の相互作用によって作り出された総合的な産物である（図2-a,b参照）。比喩の意味を談話から離れて喩辞と被喩辞だけで言及した従来の考え方は、慣用的な比喩表現の意味を説明するには不自由しないかも知れないが、独創的な比喩表現になるほど的確な意味の説明が難しくなるであろう。少なくとも、比喩の的確な意味は、談話の全体的構造の中で始めて解釈できるものと言えよう。

付記……この論文をまとめるに当たって有益な御助言をくださった、筑波大学文芸言語学系の芳賀純、中右實両先生にお礼申し上げます。

【参考文献】

Anderson,R.c.,Picchert,J.W.etc.(1976)'Instantiation of general terms'.
J. of Verbal Learning and Verbal Behavior,15.
——— etc.(1980)'The meaning of words in context'In R.J.Spiro,B.C.
Iser,W. （轡田収 訳）(1982)『行為としての読書』 岩波書店.
池上嘉彦（1981） 『するとなるの言語学』 大修館書店.
——— （1982） 『ことばの詩学』 岩波出版.
Wittgenstein, L.(1953) Philosophische Untersuchungen.Blackwell.
Ullmann,S.(1957) The Principles of Semantics.2nd Edit.Basil. Blackwell.
Elmar Holenstein(川本茂雄、千葉文夫訳；1983)『ヤーコブソン』白水社.
Kagan,J. (1971) Change and continuity an infancy.New York:Wiley.
Gardner、H（佐伯胖 監訳）（1987）『認知革命』 産業図書.
楠見 孝（1987a）「比喩表現の理解過程」『表現研究』46.
——— （1987b）「比喩表現ー効果の測定」 『国文学』32-14.

楠見　孝（1988a）「共感覚に基づく形容表現の理解過程について」『心理学研究』58.
――――（1988b）「共感覚的メタファアの心理」『記号学研究』 8.
國広哲弥（1970）『意味の諸相』　三省堂　pp. 5-10.
Cole,M. & Scribner(1974) Culture and Thought. John Wiley.
佐伯　胖（1981）「認知」『新版心理学事典』　平凡社.pp.657-658.
――――（1982）『認知心理学講座３』 東京大学出版会.
Shibles,W.A.(1970) Metaphor and Annotated Bibliography and History. Wisconsin;The Language Press.
Stroik,T.S.(1988)The Pragmatics of Metaphor. Indiana,Indiana University Linguistics Club.
田中穂積　他（1983）『LISPで学ぶ認知心理学』　東京大学出版会.
Neisser,U(1976) Cognition and Reality,San Francisco:W.H.Freeman and company.
中右　實(1984)「意味論の原理(1)」p.26（『英語青年』30-1,pp.24-26）
芳賀　純（1988）「現代心理学の理論と教育：第３回」『指導と評価』V.34-6.
波多野完治（1988）「逸脱文体論と前景化論」『日本語学』7-2,pp.87-103.
Barlett,F.C.(1932) Remembering. Cambridge, England:Cambridge Univ.Press.
Piaget,J. (1952) The origins of intelligence in children.New York:International Univ. Press.
ブラウン、A.L.（湯川良三訳:1984）『メタ認知』 サイエンス社.
Bruce & W.F.Brwer(eds), Theoretical issues in reading comprehension.Lawrence Erlbaum associates.
宮崎清孝（1982）「理解と視点」 佐伯胖『推論と理解』東京大学出版会.
山梨正明（1988）『比喩と理解』 東京大学出版会.
Richard,I.A.(1936)　The Philosophy of Rhetoric. London:Oxford Univ.Press.
李　徳奉（1982）「現代日本語における比喩表現の使用傾向」『計量国語学』13-5.
――――（1985）「比喩の意味構造による類型研究」『同大論叢』15.
――――（1986）「比喩の分類体系研究」『同日語文研究』1.
Lakoff,G.(1980) METAPHORS We Live By, Chicago:Univ. of Chicago Press.
――――（1987）Women,fire, and dangerous things,Chicago:U.of Chicago Press.
Rosche,E. & Mervis,C.B.(1975)'Family Resemblances',Cognitive Psychology,7.

The Structure of Metaphoric Meaning
- from a cognitive perspective

Dokbong YI

This paper will consider various features of metaphor as a cognitive structure, as well as elements in actual discourse which form the perceived meaning of metaphor.

Until now research has focused on the meaning of metaphor at the lexical level, and thus only the semantic characteristics present in both tenor and vehicle,have been treated as having metaphorical meaning. In addition to the correlative general meanings of tenor and vehicle, however, this paper examines through a simple experiment those elements of metaphorical meaning related to semantic choice, eg. syntactical structure, phonetic and metrical structure, discourse style,intention of speaker, cultural and personal background of listener, relation between speaker and listener,etc.

New elements in metaphorical meaning which are part of neither tenor meaning nor vehicle meaning are also considered.